鳴らないケータイ

内田花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鳴らないケータイ

【Ｎコード】
Ｎ４５４２Ｅ

【作者名】
内田花

【あらすじ】
些細な事で別れのメールを受け取った私。彼とのことを考えるが、別れを決意する。そこに待ちわびたケータイがかかる。

窓の向こうは、斜めに振り下ろす激しい雨に、町が霞んでいる。向かいのビルの窓も、傘の花を咲かせ通りをゆく人も、重いほど葉を茂らせた街路樹も、その輪郭が滲んでいるようだ。
ガラス越しの音のない雨の風景は、一層冷たく感じた。

私は膝を抱く手に力を込めた。狭苦しい8畳ほどの1ルームの床に、投げ出されたファッション誌。テーブルの上でいつか冷めてしまったマグカップのコーヒー。食べかけの板チョコ。そして、赤いケータイ。
壁にもたれ、膝を抱えて、白い天井を見る。
そして、音程の外れた歌を口ずさむ。沈んだ心のトーンとは対象的な可愛いアイドルの、妙にビートの利いたアップテンポな曲。普段と何も変わらないことを知らしめるように、元気よく！

雨の日曜日。
一人ぼっちの八階の部屋。

「私のケーバンとアドレス、消しといて」

昨日、一度も笑ってくれない彼に、思わず平然と告げた言葉。私の最後の強がり……。私の最後の賭け……。私の最後の反発……。高飛車な言葉は二人の距離を太陽と月ほども広げる。彼は言葉を閉じた。
どうして素直じゃないのか自分でも解らない。
笑って待ち合わせしたのに、原因も忘れるほど些細な事で喧嘩した。「いい加減にしろよ」と、顔をしかめて言った彼は本気で私を突き放した。「ごめんなさい」って、咽でつかえたこのひとことを

呑み込んでしまった私は、拗ねて尖らせた唇と、不機嫌な表情で彼を拒む。
いつもの軽い言い争い。私の甘えたい気持ち。つまらない事で感情的になる。手当たり次第に嫉妬する。どんな時にも気持ちを欲しがる――――全ては彼を好きだから。好きで好きで堪らないから。
堪らなくなってケータイを掴んで、開いた。昨日の最後に来たメールをもう一度開けてみる。

――――ＴＯ．沙織――――ＦＲＯＭ．　洋輔
『ありがとう。今まで楽しかった。これを送ったら、約束通り君のアドレスは消します。さようなら』

「さようなら」が心に落ちた。まるで貯金箱に入れた百円玉のように、ストンと落ちて心のそこに巣食う。
本当に別れたんだろうか……。こんなに簡単に。
黙ったままの彼が、きっといつものように「別れたくない」と、言ってくれる。そして、抱きしめてキスしてくれる。私は、ずっとそう信じていた。彼を信じてないくせに、こんな気休めは素直に信じる。なんて愚かだ！

鳴らないケータイは、石より重いように見える。それは意思を持っていて、掛かってきた彼からの連絡を悉くブロックしているのでは……と、思えるほどに頑なだ。あれから二度と鳴らなかった、彼専用の着信音。

「僕と付き合ってくれませんか？」
私は驚いて彼を見た。２年前、食事に誘われて、ウキウキした気分の私に、信じられない一言。
「私でいいんですか？」

人気者の彼の言葉と思えなくって、思わず聞き返した。
「その……、いいんじゃなくて、君じゃないと駄目なんだ」
真っ赤になって、それでも真っ直ぐ私を見て言ってくれた彼。
職場には、いっぱい女の人もいるし、彼に惹かれている人も知っていた。それに私は地味な女だし、飛び切りスタイルが良い訳でもない。平凡で目立たない普通のＯＬ。これが私を見る世間の目。
社内でも将来を嘱望された彼は、とても輝いた存在。その人が私を選んでくれた。私の全てに羽が生えた。

恋は不思議だ。
愛される事で、途端に自信というオーラを纏う。私は仕事も私生活も、ありふれた日常から飛び出したように、鮮やかな色に包まれている気がした。
何を見ても、何をしても、全てが彼に繋がる。好きでは納まらない……溢れる気持ち。

でも、いつの頃からだろう。
傲慢――――我儘、身勝手、嫉妬、疑い。
愛してると言わないだとか、キスの回数が減ったとか、メールが短くなったとか、上げれば切りなく不安になった。
支配されたい、支配したい。理解していても、彼を思いやる前に嫉妬して勘ぐる。疑う……。
昨日も、後輩の女の子に嫉妬して、
「私の事なんかどうでもいいんでしょ？　男って若い子好きじゃない！　そうでしょ？」
と、つまらない事で責めた。
「僕を信じてないのか？」
洋輔は、顔を曇らせて呟くように言った。

誰かのエッセイに書いてあった。

『与えて欲しいと思うなら、自分は与えているのか考えなさい。充分に与えていれば、相手も充分に返してくれます。それが思いやりと言うものです。そして信頼が生まれます』

奇麗ごとだと思ったその一文が、今は心にべったり張り付いている。

いつも与えて欲しかった。本当の気持ちを、深い愛を、私だけのものだと言う確証を……。

いつも言って欲しかった。愛している。愛している。愛している。君だけを……と。

だけど……、私は彼に何を与えてあげた？

手に持ったケータイを放り出した。

そして、突然溢れ出た涙に顔を覆った。込み上がる嗚咽が次第に大きくなる。

今はこんなに乱れて泣けるのに、どうしてあの時泣けなかったのだろう。

一人で後悔に涙を零す私には、雨の景色は似合いすぎる。どんより重い灰色の空は、まだまだ泣くつもりでいるようだ。雨は益々激しくなる。

「洋輔……」

名前を呼んでみた。涙で視界が滲んでしまう。

私は床に転がったケータイを拾い上げた。そして、彼にメールを打つ。ゆっくりと、一文字一文字躊躇いながら。

――――ＴＯ　洋輔　――――ＦＲＯＭ　沙織

『ごめんなさい』

雨が上がってきた。空が明るくなった気がする。
メールを打って1時間経った。でも、やっぱり鳴らないケータイ。
もう、涙も枯れてきた。考えすぎた頭の中が、最後の言葉を繰り返した。

『2年間、ありがとう。さようなら』

別れる時って、こんなものだ。諦めたら、諦められる。我慢したら、我慢できる――――そう、信じよう。もっと悲しい事はある。もっともっと辛い事はある。時間がきっと癒してくれる。そう、信じよう。

ケータイを手に取った。最後のメールを打つために……。ぎゅっと強く握り締める。

その時、突然ケータイが鳴り出した。手のぬくもりで、凍ったICチップが動き出したようなタイミングで。

壊してしまうほど力を入れて開く！　息を呑んで耳に当てる！

――――「悪い！　遅くなった」
「洋輔……」
――――「お前ねえ！　おまえこそ遅いんだよ。ごめんなさいが！　昨日一晩待ってたんだぞ！　お陰で今起きたとこだ。ふざけんな！」
「あ、でも……アドレス削除するって……」
――――「ああ、今度はマジで頭に来たから、そのつもりだった。でもな、出来なかった。こんな事で別れたくないし。お前が本気なのか知りたかったから、返事を待ってた」
「う…う……、ごめんなさい。愛してる……。本当に……愛して

る……。貴方なしで生きられない……」
――――「え、おい、どうしたんだ、急に。普段言わない事を言うなよ。照れるよ」
「だって……、本当の気持ちだもん」
――――「沙織……。解った、もう泣くな。待ってろ、今からそっちへ行くから！」

雨は止んでいた。
洋輔が濡れないでここへ来れると思うと、ほっとして窓の景色に見入った。

私の手の中で温まったケータイが再び鳴った。
――――「言い忘れた。僕も愛しているよ。お前だけを……」

素直じゃないね。正直に伝えられないお互いの気持ち。
私は、もう一度、あの一文を思い出した。
『与えて欲しいと思うなら、自分は与えているのか考えなさい。充分に与えていれば、相手も充分に返してくれます。それが思いやりと言うものです。そして信頼が生まれます』

ケータイを閉じると、今度は嬉しくて涙が頬を伝った。
この想いを、これからは言葉に変える。もっともっと愛して欲しいから。

（後書き）

お読み頂き有難うございました。
感想を頂けたら嬉しいです。
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4542e/

鳴らないケータイ

2010年10月18日13時44分発行